

カビニ先生

乗一と答へ



日本の古典文学

令和五年夏 編

十時三十分

第一回

始  
令和元年

令和五年六月二日 金曜日

十時～十一時三十分

東京都渋谷区武蔵野1-1-1

伊藤雅敏



オムト

擬態語  
擬音語  
擬産語

音韻体系からその聞える

人間の言葉

犬

縄文時代終末...

朝鮮半島から人が運ぶと云う 十犬も渡来

弥生時代

食用...長崎県津道跡から出土

小型

大和時代 耳書紀「地方行政組織の守衛」飼犬 (大養部)

基本的に野放し野犬 食用と守衛と遊玩

奈良と平安時代 鷹狩の供、養犬、野犬 犬は小犬

鎌倉 - 江戸時代 放し飼、犬造物 芸術鑑賞的

軍用犬、伝令犬 +

「生類憐みの令」手厚、保護政策 高砂層の愛玩動物

大鏡

白河院政期 1086

1129

「道長権物語」

女の法事 → 飼犬主が説教を頼んだ

清範法師 (播磨国の僧侶)

「ただいま、過去聖霊は蓮台の

上にて、ひよと吠え給ふらん」

今昔物語集 卷六、三十九 1110 1124

犬の鳴き声 「行」ギン?

- 大鏡 「ひよ」=「びよ」 1130 天承元
- 狂言本 「びよびよ」「びようびよう」 1642 寛永6
- 狂言記 「びよ」「びよう」「びう」 1660 万治3
- 用明天皇職人鑑 近松桐左衛門鑑 「びう」 別記 1705 宝永2
- 柿山伏 「わんわん」 江戸期
- 浮世床 「せん」

同じ音・同じ声 ↓ 生きた骨に歴史と文化に  
よって違ってくる

- 日本 英語 wow わんわん きん Bow ボウ wuff ワフ
- 仏語 Woof ワフ waouh ワウ
- スペイン Guau グアウ
- 蘭 Blaf ブラフ
- ルマ語 Ham ハム
- 韓国 Meong モン
- 似梨 Guk グク
- フィリピン Heu ヘウ
- インドネシア Haap ハップ
- ハワイ (ハワイ語) Haw ハウ



李園時代には中国から伝来した

猫

源氏物語 若菜下

「人氣遠かりしものも ともく馴れてまきむは

衣の裾にもはみ寄り臥し寝るるを

まめむかにうつくしと思ふ ことなきがゆへ

端近く寄り臥し給へるに來てむかひうと

ことらうだに鳴けば かき撫でて

うたむかむかたは ぼほ笑まむ

平安時代

ねうねう

鎌倉時代

ねんねん

江戸時代

にゃにゃ

英語

mew ミウ

mew ミウ

# 弥生古墳 (500年頃)

巻布衣 (貫頭衣から)

← 一枚の布を巻きつけた  
ワンピース (ズボン) へ



貫頭衣 袖なしワンピース

← 上から吊る腰で貫頭の紐を結ぶ  
ワンピース 上は丈の短衣  
下はロングスカートのようなもの



# 大和

きぬほろま  
衣袴

上は長袖 下は奈布

丸袴 下はゆたか  
垂袴 膝に結ぶ



きぬも  
衣裳

上は長袖 下はロングスカート

帯を正面に結ぶ  
袴は死折に比礼長

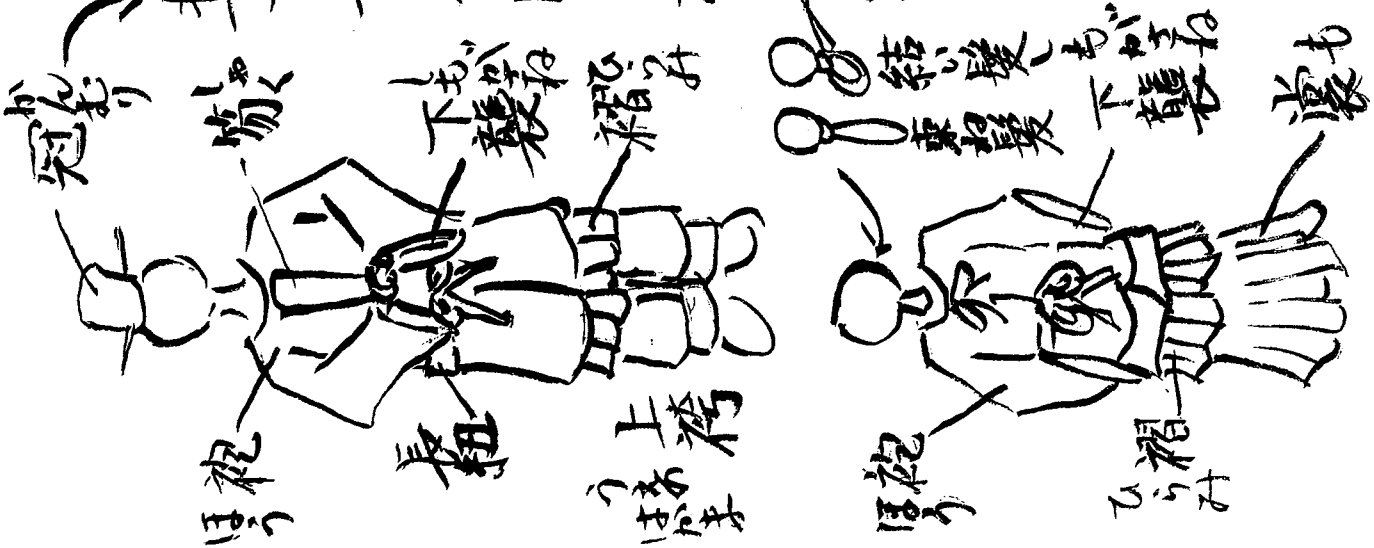


# 飛鳥 700年頃

左衽着装法

十二階

→ 推古天皇11年12月初めに冠位を行つた



奈良 790年頃

だんだんゆたたりし

律令政治

歌垣の女(農村)

ひめ鏡(氏)

元正天皇

養老3 719 二月三日

帯巾



右衽令し

縁礼 あぶ標(主毛) 内礼 袷袋

右衽 着物は左前二命

五穀豊穡 神を崇め奉る

すべこの人(庶民も)

享乐的祝祭的行事 享乐的風流の遊び

礼服

朝服

制服

五位以上の官位

有位の妻

無位の官妻

文官 武官

出任中の参朝服

冠の冠 袴 袴 (白袴)

文官



朝服

下袴 (内袴の袖)

帯巾

關服(袍)

袴(白袴)

武官





西本願寺春萬葉集

藤原宮御宇天皇代 吉原廣野 延喜元年十月十日  
德位輕大守 皇日天孫

天皇御製歌

春過而夏來未長之句能就有天皇君來山

穂久瀨文庫藏 伝二卷為竹筆

新古今和歌集卷第三

夏哥

興不知 持統天皇御宇

夏哥行幸行幸行幸

夏哥行幸行幸行幸



萬葉集 28

天皇御製歌

持統天皇 ↓ 文系  
○ 清御原宮  
× 藤原宮

⑨

春過而

春過きて

春が過ぎて

夏来良之

夏来たらん

夏が来たらん。

ら - 推定の助動詞

白妙能

白たの

真白

衣乾有

衣干したり

衣が干してあるよ。

天之香来山

天の香真山

天の香真山に

新古今和歌集 夏 175

天皇御製

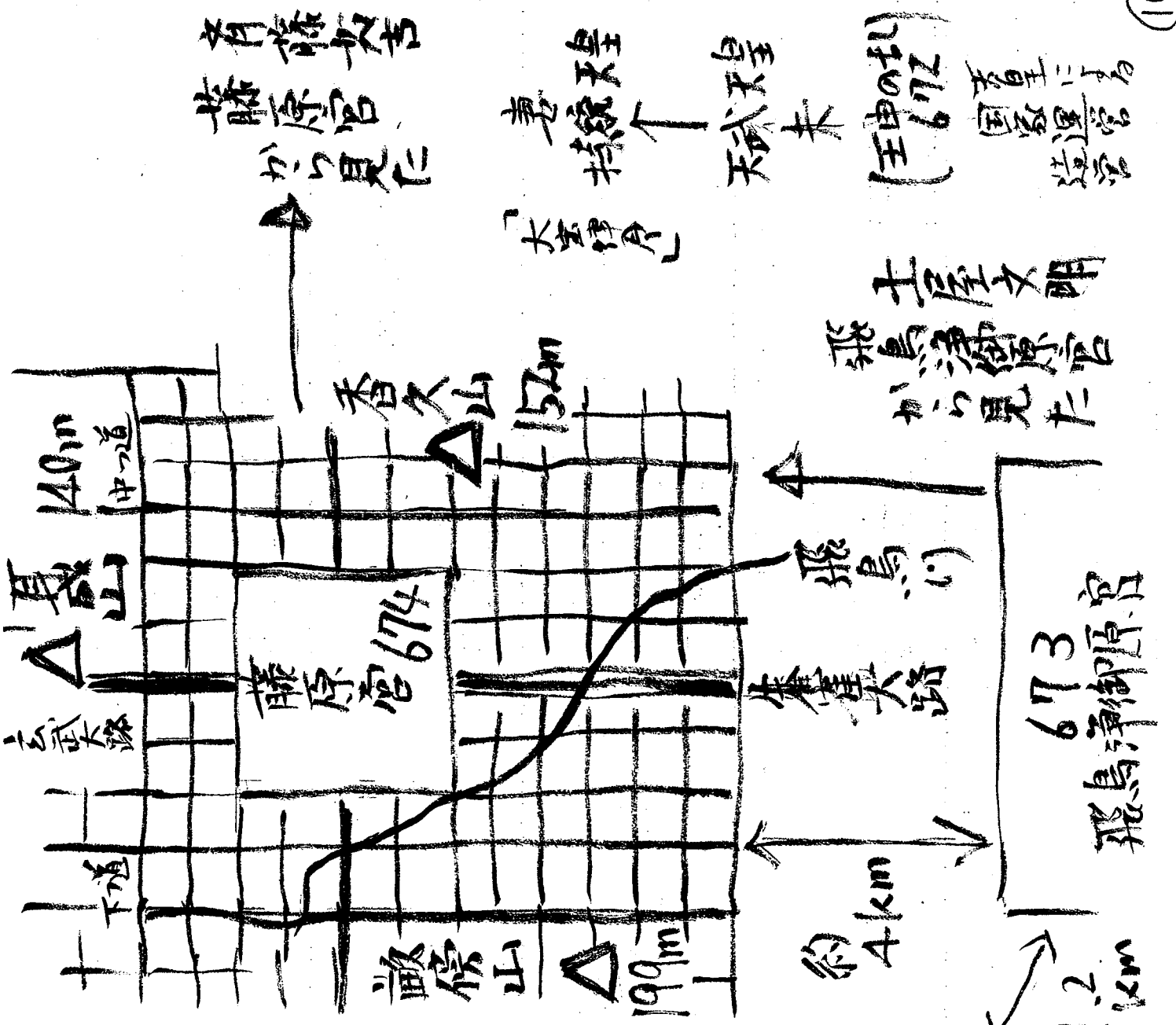
在 といふ... 伝

春過きて夏来たらん 白たの 衣干たり 天香真山

来たらん

すふ

天皇御製



梅雨明け 青天  
 白雲 - 春倉  
 大和三山 ? 疑王 祇  
 飛鳥の三角関係 ? 男 女 武 額

天武持統陵  
 八角五段形墳

耳 男 男 女 男  
 敵 男 女 男 男  
 香 女 男 女 女  
 彌 彌 彌

有藤如吉  
 藤原宮  
 から見た  
 天武天皇  
 持統天皇  
 天武天皇  
 未  
 (王中の北) 672  
 飛鳥浄御原宮  
 土屋文明  
 飛鳥浄御原宮  
 から見た

由布佐礼婆

夕きほ

夕べにほ

安伎可左年思

秋風寒し

秋風が寒し

和伎母故我

吾妹子が

然が妻が

等伎安良比其母

解き洗ひ衣

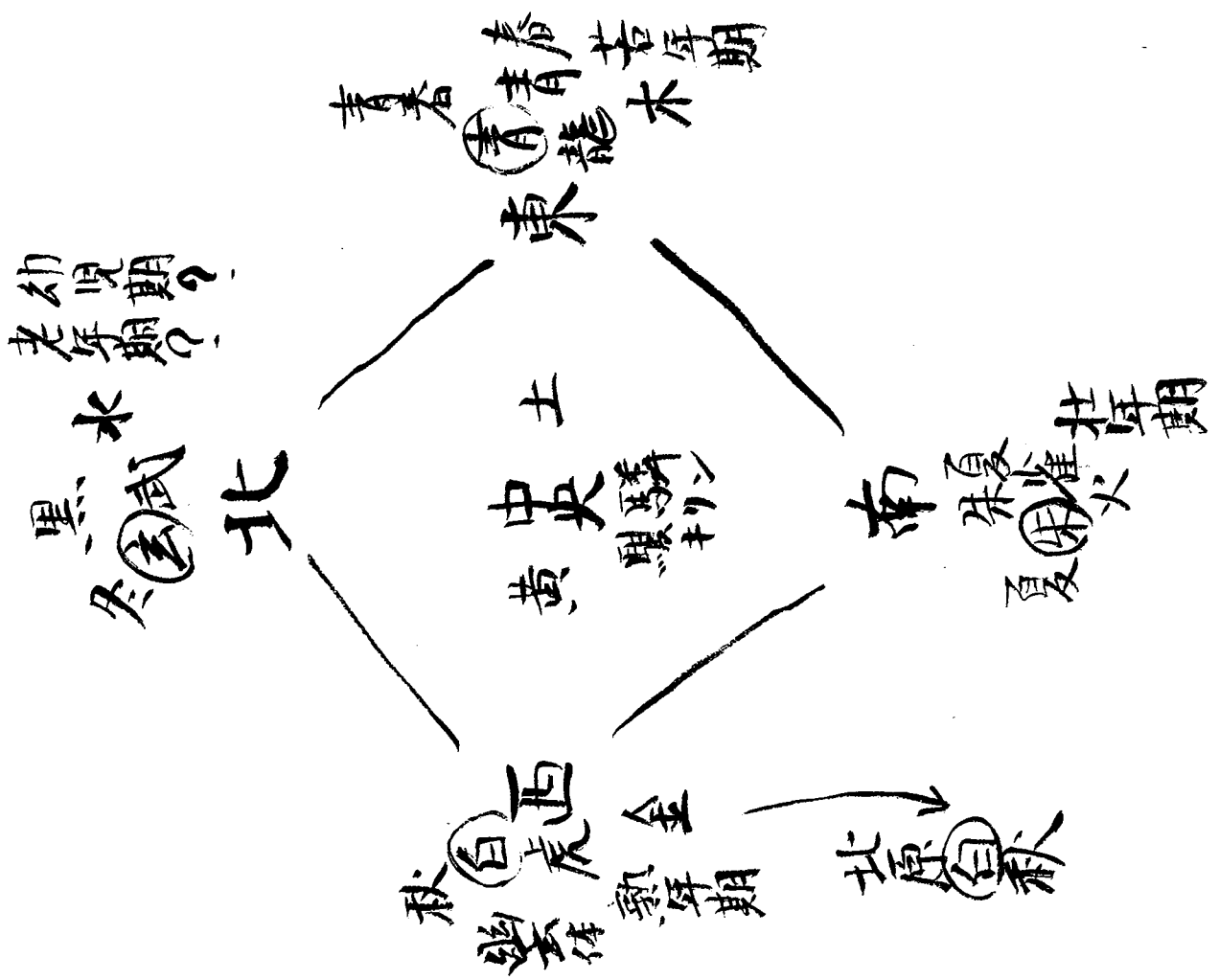
解き洗ひ衣

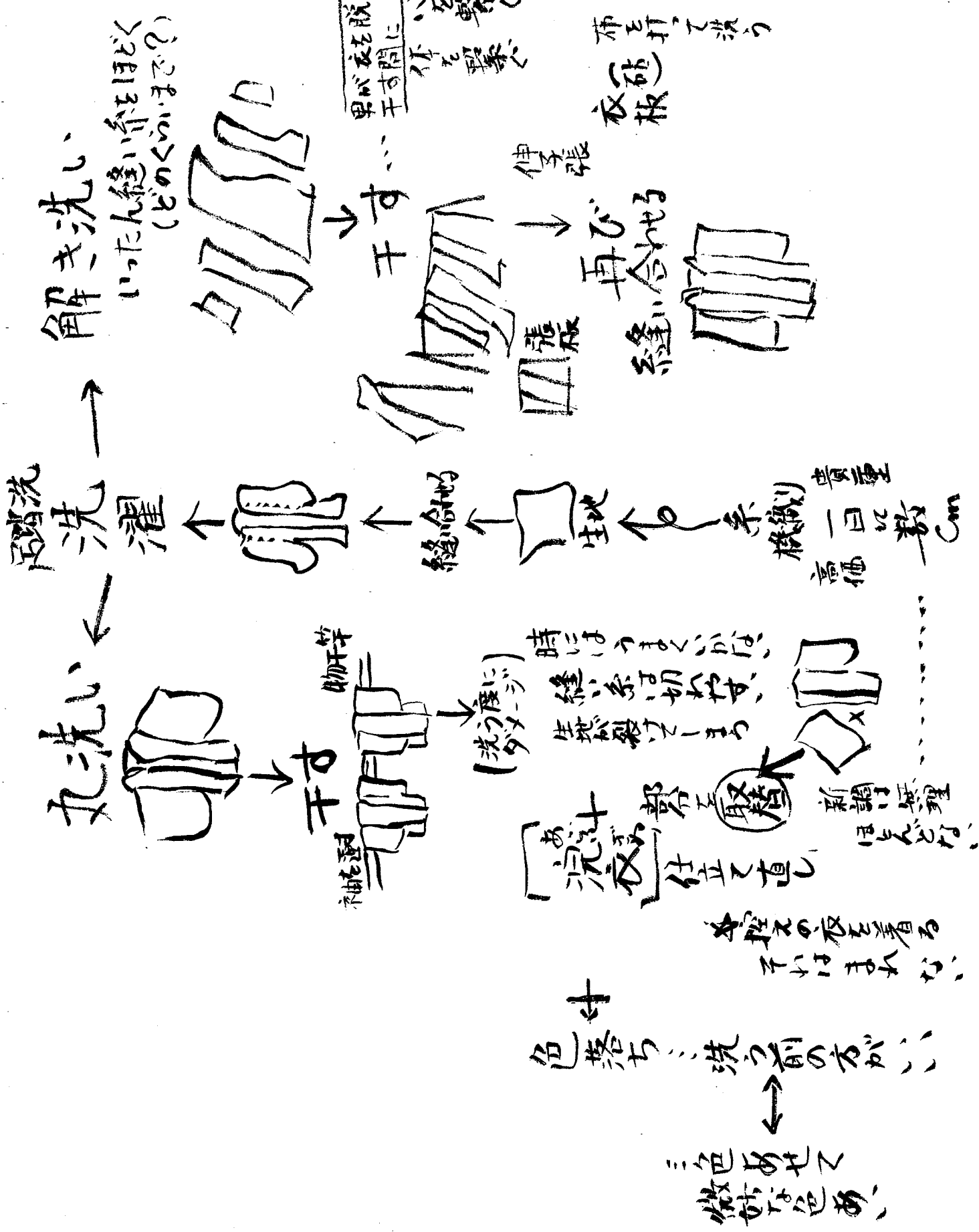
着物を

由伎豆波也伎年

行きて早着衣

帰る早の着衣





洗濯休暇願 正倉院文書にいくつもある

・天平宝字二年 758 十月二十一日付 五日間

(写経生)

大原国持「大原国持撰解 請暇日事

合伍暇日

右、請穢衣服洗為暇日如前 以解し

・宝皇三年 卯 三月二十日付 三日間

(経師)

巧清成「巧清成解 申請暇事

合三箇日

右件、依穢衣服洗請暇如件、以解し

解いて洗う、また縫、喜守

針仕事をするため

一張羅に着き、り雀

洗、知つと出仕する時の衣持おれぬ

衣類関係の洗濯

女性仕事の一つ、針仕事 → 縫、付

必須 穴の縫い

結局着るもの代わりがなると

出仕できなう!!

大正之

大君の

大君の

塩焼海部乃

塩焼く海人の

塩焼く海人の

藤衣

藤衣

藤衣のよりに

穢者雖為

なれはけむれも

身に刺れる三つ葉も

弥希将見毛

ふゆすらしも

はひ新鮮をかひも

天皇に献上する塩は越前国鹿(福井県敦賀市)で産したものの

その作業衣は(藤衣)藤衣製

初秋 藤の蔓から採った繊維を糸に

冬 織る作る

○麻糸より丈夫強い

×肌触りが荒い。少作業衣として使用

新指で織るとまじけども ざばり ぶんがる葉も

新鮮で可愛い

貧乏ながらも喜ぶる家庭